ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.23 No.6 June 2022

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

6

CONTENTS

・巻頭言
「型」について②
／永尾　教昭 1

・文脈で読む「身上さとし」（新連載）
連載の目的
／深谷　耕治 2

・伝道と翻訳―受容と変容の“はざま”で―（35）
天理教教義翻訳の諸相②
／成田　道広 3

・音のちから―中国古代の人と音楽（8）
動物に音楽がわかるのか？
／中　純子 4

・ヴァチカン便り（56）
ローマ法王、ウクライナ侵攻を非難
／山口　英雄 5

・ニューヨーク通信（13）
文化協会でのたすけ合い
／福井　陽一 6

・思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考（19）
仏教にみる障害者像
／八木　三郎 7

・おやさと研究所ニュース 8

第347回研究報告会／連載執筆のねらいと執筆者紹介／2022年度公開教学講座のご案内

巻頭言

「型」について②

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

前号で相撲を例に出して、「型」の重要性を述べた。世界の中でも特に日本人は、この型を大事にする民族だろう。茶もただ飲むのではなく、花もただ生けるのではなく型を作る。それはスポーツにも及んでいて、すでに述べた相撲だけではなく弓も剣も空手も、その所作つまり型を守りそして「道（どう）」となっていく。ごく最近知ったが、プロの将棋棋士の対戦では駒の並べ方にも厳格な決まりがある。

宗教の神事も当然型が重要で、それは代々引き継がれ滅多に変更するものではない。天理教の場合、つとめ自体は教祖が教えられた最高の祭儀であり、それを変えることは許されない。ただつとめの前段とも言うべき祭儀式は元々神道から取り入れられたもので、今日までも様々な変化を経て現在の形になっている。加えて日本国外で行う場合、それに使用する道具を調達できないなどの理由で変えざるを得ない場合も少なくない。

例えばかつては榊（さかき）の枝で拵えた玉串を奉奠（ほうてん）していたが、筆者の勤めていたフランスに榊は生えておらず、仕方なく似た樹木の枝を使用していた。また祭文と呼ばれる、神道における祝詞のような神へ奉上する言葉が読まれる。これは折り畳んだ紙を右から左へと開いて読み進むが、これは縦書きだからできるのであって、英語などの横文字ではそのような体裁では不可能だ。第一英語などは左から右へと読む。筆者はヨーロッパ出張所の祭典時、これをフランス語と日本語で読んでいたが、フランス語のほうは致し方なく、文言が書かれてあるA4の紙を折り畳んだ紙の最初の部分に貼り付けていた。

このあたりのことは、国によって変えざるを得ないだろう。しかし、ではどこまで変えて良いのかという議論は常に必要になる。一つの目安は、神事に関することは慎重にすべきで、そうでない部分、具体的に言うと教団の行政的、事務的な事柄、つまり俗事はある程度は変えていっても良いということはある。例えば多くの願書は罫紙に墨書というスタイルだが、これも検討を要する。筆を持ったことすらない外国人（日系人を含む）教会長らには現実にそれは不可能であり、普通紙にパソコンで外国語で書いた願書にペンで署名という一般的な形にしていかざるを得ないと思う。そうでなければ、日本にアイデンティティを持たない教会長が海外で着実に増えていくことは難しいかもしれない。

少し話が脇道に逸れるが、筆者がまだ天理教海外部に所属していた頃、この問題を真剣に検討した。その際、反対意見の一つが「罫紙に墨書は永久保存できる」というものがあった。これについては、筆者は懐疑的だ。まだ検証されていない、と言うか検証しようがないからだ。本当に、何万年か後、米ホワイトハウスのトップシークレットの書類から我々の些末な雑誌、書籍に至るまですべてこの地球上から消えてなくなり、罫紙に墨書で書かれたものだけが残るだろうか。仮りにそうだとしても、願書類を永久に残さねばいけないものだろうか。

こうして教団行政的な事柄は海外ではある程度は変更しても良しとしよう。ただ、これもすでに述べたが、天理教では教会の祭典日の変更、特別な祭典の執行、教会内建物の新、改築といった事柄は、決して事務的にはなされず事情運びという大切な儀式を経て実現される。つまり、行政事務的な事柄も、神事によりなされるケースが多く必ずしも俗事とは言えない。従ってそこで「型」が重要となり、堂々巡りのようだが、それのための願書も罫紙、墨書が守られるべきだという議論になっていってしまう。

文脈で読む「身上さとし」（新連載）

連載の目的

天理大学人間学部講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

前提としての『身上（みじょう）さとし』

本連載の目的は、「おさしづ」における「身上さとし」（身体上の患いを通した親神からの諭し）を文脈に即して考察し、その身上に込められた神意を探究していくことである。

このようなアプローチの前提には、『教理研究身上さとし―おさしづを中心として―』（深谷忠政、天理教道友社、1962年。以下『身上さとし』）がある。本書は教学の研究書であるが、一般の信者たちにも広く読まれた信仰の書でもある。まず本書の研究の特徴を確認し、本連載の見通しを立てておきたい。

『身上さとし』の執筆動機には、次のようなことが挙げられている。すなわち、

- 身上（病気）は「日常生活の破綻」の最も深刻なものであり、「身上さとし」がお道の教説の上で重要な部分を占めていること。
- 「身上さとし」を個人の体験や思いつきではなく原典に基づいて研究すること。
- 医療に対する「身上さとし」の意義を確認すること。

これらの動機には、著者の北米布教の体験が色濃く反映されている。若い頃から海外布教を志していた著者は1959年に39歳でアメリカ伝道庁4代庁長を拝命し、それ以降1965年に帰国するまで北米布教に従事していた。1962年に出版された本書の大部分はアメリカで執筆されたようである。本書では次のように述べられている。

> 医療の設備のととのったアメリカにおいて、「身上たすけ」従って「身上さとし」は不要であるという、渡米当初に聞いた話は、日がたつにつれて必ずしもそうでないことが判明して来た。
>
> 病気が如何に生活を脅かすかという問題は、日本より遥かに深刻で、身上に際しておさづけを喜び、身上さとしを聞こうとする傾向は意外に強いものがあるように思われる。[1]

このように「身上さとし」は信仰の最初の契機となる教説であり、おたすけの現場（海外を含む）においてその意義が確認されるものである。その意味で、おたすけの実践が一層求められる現在においても、なお探究されるべきであろう。

ただし、著者はこのように「身上さとし」の意義を説きつつも、それはあくまで「おつとめ」完修のための補助的なものであって、それのみに終始してはならないと指摘する。「身上さとし」を説くことの上手や下手にとらわれるのは本末転倒であり、「身上さとし」を説く場面では、おさづけの取り次ぎやつくし運びなどの信仰実践が伴われなければならないと述べられている。

さて、このような教理全体における「身上さとし」の位置づけという点にも関連して、著者は、おさしづ研究にもとづく「身上さとし」について以下のような重要な指摘をしている。すなわち、

- 「おさしづ」の「身上さとし」では、「Aの病気に対してはAという諭し」というような一義的な解答は得られないこと。
- 「おさしづ」の割書きに記された病状は、大雑把にしか分からず、医学的な病名のようには知り得ないということ。
- 同一の病状でも、ある人と別の人とでは、そのお諭しの内容が違う場合が多いこと。
- 同一人物に対して、病状は異なるものの、同じ内容のお諭しがあること。

つまり、「身上さとし」は病気に対する教説ではなく、あくまで病人に対するものであり、根本的にそれ自体で閉じた教理体系ではない。そもそもお道の「諭し」は、聞き手の「悟り」を前提にしたものであり、その意味で個別性（文脈依存性）が高いものといえる。まして当人たちの「悟り」が強く求められるような事情・身上の場面では、その諭しの個別的な性格も一層高くなるであろう。

その上で、『身上さとし』ではそうした悟りを得るための手がかりとして、類型的指示という、いわば病状別の最大公約数的な諭しを提示する手法が採用されている。たとえば頭痛であれば、ある人の頭痛への諭しと別の人への諭しのおおよその共通点が見出され、それが頭痛に対して一般的に言い得る「身上さとし」として示される。そして、そのような手法に、次のように積極的な意味が見出されている。

> このような類型的指示を見て、期待はずれの感をいだかれる人が多いと思うが、重箱のすみをほじくるような融通のきかない「身上さとし」に比較して、一見漠然としたところに、かえってその人をきずつけないようにという深い思いやりのある神意と、おさしづに基づく「身上さとし」の普遍性を汲み取るべきであろう。[2]

このように本書では、類型的指示という方針のもとで「頭痛」「目の障り」「耳の障り」といった病状に対応する「身上さとし」が提示されている。それは個々別々の状況に対して一義的な解答を示すものではないが、悟りを得るための一定の基準を示すものであり、本書の簡潔明瞭な文体で記された「身上さとし」は身上で悩む者に的確に語りかけてくるように思われる。本書が長年にわたって版を重ねているという事実が、そこから実際さまざまな手がかりを得た信仰者が多数いることを裏付けているといえよう。

本連載のアプローチ

ところで、『身上さとし』では、「頭」「眼」「耳」などの器官ごとに項目が立てられているが、細かく見ていくと、実は異なる器官に対して同一の「おさしづ」が取り上げれている場合がある。たとえば、明治21年5月22日（陰暦4月12日）「増野正兵衛鼻の奥、左胸腹の下出物出来、胸むかつき気分悪しく身上障りに付伺」に対する「おさしづ」は、『身上さとし』では「鼻」と「胸」（「胸むかつく」）の両方の項目に登場している。あるいは、明治22年7月1日（陰暦6月4日）「増野正兵衛六月二十五日より二十七日まで三日間、毎朝一度腹下り、二十八日おぢばへ出て止まり、頭痛胸むかつくに付伺」に対する「おさしづ」は「胸」（「胸むかつく」）と「腹」（「腹下り」）の両方に使われている。

こうした事例は、「胸」や「腹」といった分け方とは違う探究の仕方の必要性を示しているのではないだろうか。先に記したように、そもそも『身上さとし』でも「同一の病状でも、ある人と別の人とでは、その諭しが違う場合が多いこと」や「同一人物に対して、病状は異なるものの、諭しの内容が同じ場合があること」が指摘されている。そうした点を鑑みると、「おさしづ」にもとづく「身上さとし」に対しては類型的な捉え方に加えて、個別的な文脈に即した読み方が必要であると考えられる。

本連載は、こうした観点から「頭痛」や「腹痛」など割書きに見られる病状に注意を払いつつも、それらを類型的に整理するのではなく、その都度の個々の文脈に即して、その身上に込められた神意を探究する方途を取っていきたい。

[引用文献]
（1）深谷忠政『教理研究身上さとし―おさしづを中心として―』天理教道友社、1962年、9頁。
（2）同書、8頁。

天理教教義翻訳の諸相 ②

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

英国布教と教義翻訳

明治41（1908）年、技術者として大阪に滞在していたイギリス人、トマス・ローズが船場教会を訪れた。彼は、一説によるとグリーンの論文によって天理教を知り（上村，1959:135）、自身が信仰していたクリスチャン・サイエンス（病気の原因は心にあると説くキリスト教系宗教）との類似性から「身上たすけ」に関心を寄せていた。海外伝道を熱望していた梅谷梅次郎会長はこれを契機に明治43（1910）年、3人の布教師を英国へ派遣した。

その華々しい鹿島立ちは同年7月号の『みちのとも』に「去月廿五日船場教會より赤木徳之助高見庄蔵正信藤次郎の三名を英京倫敦へ布教に派遣した、是れ天理教海外布教の嚆矢（こうし）なると共に日本海外布教の魁（さきがけ）である」との序文に始まり、詳細に記されている。

渡英に先立ち、船場から布教用英文小冊子 *History, Doctrine & Practice of Tenrikyo*（Tenrikyo Senbakyokwai, 1910）（以下、『英文天理教』）が出版された。これは、中西牛郎に執筆を依頼し、ローズの通訳者、福永秀夫に英訳を依頼したものである（濱田，1981:108）。編集には英語学校に通い渡英に備えた高見庄藏が書記として参加した。文書伝道が比較的軽視されていた時代、中西のために天下茶屋に一軒家を借り、福永にも謝礼を出し、経費を度外視してこの小冊子は作成された（梅谷，2010:17）。これは教内初の教義翻訳書となった。内容は「序文」「教祖」「教会」「神」「人間」「救済」「信仰」「事業」「儀式」となっており、「みかぐらうた」第一節から第四節の英訳も含まれている。

著者の中西は天理教と関わりが深く、明治33（1900）年から、井上頼國、逸見仲三郎らとともに雇用され、一派独立請願のための天理教教規や教典、みかぐらうた釈義の編纂などに携わった人物である。その招聘には松村吉太郎が関わっていた。中西は宗教学者として著名で、日本仏教の思想的改革に影響を与えた『宗教革命論』等を著した。彼は時には天理教校の教壇にも立っており、渡英した高見の恩師にもあたる。その後『英文天理教』は邦訳され『みちのとも』の明治43年9月号から連載されると大きな反響があり、大正3（1914）年に『訳文天理教』として道友社から出版された。

しかし、英国における『英文天理教』の評価はそれほどではなかったようだ。これに関心を抱いた現地新聞『デイリー・クロニクル』（*The Daily Chronicle*）誌の記者クラレンス・ルック（Clarence Rook）は、キリスト教の優位性を強調しつつ、次のように論じた。

「天理教とは、新なる食物、新なる飲料、又は新なる遊戯の名に非ず。而してそは英国に於て誇大的に廣告せられしものにも非ず。僅かに若干の人の是を倫敦に於いて耳にせるのみ、四名の質朴なる伝道師日本より来りて、ベッドフォード・パークに一家を構へたりしが一小冊子を残して帰国したり。而して此の冊子は日本大阪に於いて印刷せられ、英国に於て発行せられしものにあらず。然りと雖も、余は、今茲（ここ）に、諸氏に望まんとするは、嘲笑を以てこの書を迎へられざらん事これなり、何となれば、諸氏の日本文を書く能はざると同じく、此の小冊子の匿名の著者も亦、英文を善くせざるなり。」（『みちのとも』，1912年6月号）。

また、これを読んだ英国人は「天理教の教理内容は既にキリスト教で説いていることである。キリスト教ほど素晴らしい教えは世界にないのであるから、英国では余り天理教に改宗できないであろう」と感想を述べたという（梅谷，2010:18）。

『英文天理教』では、立教時の教祖の様子を「天国より降臨した天使のように輝き」（as if an angel coming down from heaven）、現身お隠しを「教祖は90歳で天国に召された」（she went back to heaven on her reaching 90 years of age）、八つのほこりを「八つの原罪」（the eight sins）と、キリスト教の語彙が多用され、「心の清き者に幸福あり。その人は神を見る。」（Blessed are the pure in heart; for they shall see God.）とマタイによる福音書とほぼ同じ表現も用いられていた。また「うらみ」の説き分けでは「キリスト教の黄金律である汝敵を愛せよ」（in the Christian golden rule, that love your enemies）と、敢えてキリスト教的理解を促す表現もなされた。

英国人の宗教理解の基盤は既存の宗教によって形成されている。彼らが理解した天理教は、彼らに受容された天理教であり、当然、天理教者が伝えようと試みるものとは異なり、変容した天理教となる。これは海外伝道における不可避な問題の一つである。そのような受容と変容のはざまで、その理解を翻訳によっていかに操作し得るかが、翻訳という文書伝道の生命線である。

船場の英国布教は最終的には頓挫し、高見庄藏の帰国を以て途絶えた。その背景には言語能力や経費、人間関係など様々な事情が垣間見えるが、なかでも英文教義書が小冊子以外ほぼ皆無であったことも要因として考えられるだろう。実際、布教に協力的だったローズは確固たる教義書作成が急務であると助言していた（梅谷，2010:73-74）。

英訳に関わった福永は、高見が帰国してから親交があったようだが詳細は不明である。中西は最終的には天理教者となり、晩年病に倒れてからは松村吉太郎の許に身を寄せ、そこで出直（逝去）したので葬儀は高安詰所で執り行われた（『海外伝道部報』，1963:6）。彼は英国布教に関し、中西顕明の名で『みちのとも』大正元（1912）年8月号に寄稿し、布教の実際と『英文天理教』の反響を紹介している。さらに昭和4（1929）年に天理教者として出版した『神の実現としての天理教』では「英國伝道は、事跡の上から見たなれば、全然失敗に終わつたやうであるが、併し始めて天啓の聲を、歐洲文明の中心たる英京倫敦に響かせたのは、小寒子が始めて天理王命の御名を大阪市民に知らしめられたと同様に、全能の神から御誉めを頂くべきである。」（中西，1929:426）と、その功績を讃えている。

他宗教の伝道史に比すれば、天理教の海外伝道はまだ緒に就いたばかりであり、現在もなお、英国では布教の歩みが受け継がれている。『英文天理教』も期待された成果を挙げたとは言い難いが、教義翻訳の先鞭をつけた意味では先達の偉大な足跡であり、英国布教同様、過去の失敗として終わらせるにはまだ早い。否、終わらせるわけにはいかない。

[引用文献]

History, Doctrine & Practice of Tenrikyo, Osaka, Japan: Tenrikyo Senbakyokwai, 1910.
「ロンドン布教始末記（三）」『海外伝道部報』天理教海外布教伝道部、1963年6月26日号（通号61号）、pp. 6-7。
梅谷忠一『英国布教ハ天ノ指名也』天理教船場大教会、2010年。
上村福太郎『潮の如く（上）』天理教道友社、1959年。
天理教道友社「天理教とデーリー・クロニツクル」『みちのとも』、1912年6月、pp. 2-10。
中西牛郎『神の実現としての天理教』平凡社、1929年。
濱田泰三『道のなかばに』天理教道友社、1981年。

音のちから―中国古代の人と音楽（8）

動物に音楽がわかるのか？

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

最近は、乳牛にモーツァルトを聞かせるといいとか、猫がまどろむ音楽は何かという研究が行われつつあるようだが、実験による検証がなされる現在でさえ、まだまだ不明な点が多いらしい。それでもハトがバッハとストラビンスキーを聞き分けるとか、ヒトとは違うやり方で動物も旋律を認識するという、泉明宏氏の「動物の“音楽”認知」（『言語』大修館書店、2004年6月号）を読むと、やはり事実と考えていいのかなと、動物好きの筆者などは嬉しく思う。

動物は音楽に感応するのか。古代中国においては、このことをどう考えていたのだろう。まず挙げられるのは、伝説上の皇帝である黄帝の時代に、楽人の夔（き）が石を打ち鳴らすと、百獣がそれにつれて踊ったという次の記事であろう。

> 楽器がすべて調和し、秩序を失うことがなければ、神と人はみななごやかになる。夔は「わたくしが石を打ち鳴らすと、動物たちがみなそれにつれて踊ります」と述べた。
> （八音克諧、無相奪倫、神人以和。夔曰於予擊石拊石、百獣率舞。）　『尚書』舜典

これは、調えられた音楽の力は異類をも感応させるという例として、後世繰り返し引用される「百獣率舞」である。『尚書』にはほかにも霊鳥と音楽の話がみえる。

> 簫という楽器で舜の音楽である「韶」を九度演奏すると、鳳凰がやってきて、礼義にかなった姿をみせる。
> （簫韶九成、鳳皇来儀。）　『尚書』益稷

伝説の霊鳥である鳳凰は、雄と雌の声がそれぞれ6種類の音となり、それが十二律のもとになったとも言われている。また、その羽を模した形の楽器を「鳳笙（ほうしょう）」と名付け、中国音楽との関わりが深い。霊鳥だからこそ音楽を理解する能力を持つ、とされたのかもしれないが、鳳凰を異類と見なすことは許されよう。

素晴らしい音楽が異類をも感動させるというこうした考え方は、中国古代では一般的であったのだろうか。そんなことはない、という懐疑的な考え方ももちろんあった。『荘子』に見える次の話は論理的ともいえそうである。それは鳥には鳥の楽しみ方があり、人間の楽しみを押し付けるのはかえって鳥には迷惑だという文脈のなかで記されている。

> こんな話を聞いたことがあるかね。昔、一羽の海鳥が魯の郊外に舞い降りた。魯侯はめでたいしるしとして喜び、その海鳥を祖先の廟に迎えて饗宴を催し、「九韶」（舜の音楽）を演奏して歓待した。牛・豚・羊の肉をそろえて御馳走した。海鳥は目をぱちくりさせて悲しむばかりで、一切れの肉も一杯の酒も口にせず、三日で死んでしまった。（中略）「咸池」（黄帝の音楽）や「九韶」を、洞庭の広野で演奏すると、鳥はそれを聞いて飛び立ってしまい、獣はそれを聞いて逃げてしまい、魚はそれを聞いて水中にもぐってしまう。人だけがそれを聞いて、みんなでまわりを囲んで観覧するのだ。魚は水に棲んで生きるが、人は水に溺れて死んでしまう。魚と人は好みが異なるので、こうした違いがあるのだ。（且女独不聞邪。昔者海鳥止於魯郊。魯侯御而觴之於廟、奏九韶以為楽。具太牢以為膳。鳥乃眩視憂悲、不敢食一臠、不敢飲一杯、三日而死。（中略）咸池九韶之楽、張之洞庭之野、鳥聞之而飛、獣聞之而走、魚聞之而下入。人卒聞之、相与還而観之。魚処水而生、人処水而死。彼必相与異其好惡、故異也。）　『荘子』至楽篇

ここで注目したいのは、百獣がうちつれて踊るはずの、黄帝の「咸池」や舜の「九韶」という音楽を聞かせても、鳥・獣・魚は逃げてしまうとして、その好むところが全く違うとはっきりと言っているところである。人間の音楽のなかでも、調和して神と人がなごむとされる素晴らしいものを聞かせても、異類には理解されないと冷静に観察している。古代人はみな異類の感応を信じていたというわけではないらしい。そこには冷めた現実的な考え方がすでにあったようだ。そういえば「馬の耳に念仏」と同義の「牛に対して琴を弾く」という故事成語もある。

> 魯の賢士の公明儀は、牛に向かって「清角」という琴の名曲を奏でたが、牛は相変わらず草を食べていた。牛が聞いていなかったのではなく、牛の耳にはそれが合わなかっただけである。（公明儀為牛弾清角之操、伏食如故。非牛不聞、不合其耳矣。）　『広博物志』に引く『酉陽雑俎』

だとすれば、乳牛にモーツァルトを聞かせても無駄なのだろうか。人間と動物では、惹かれる音が違うのであろうか。とにかく、人間の愛する音楽は動物には理解できないと、古代の人がはっきりと認識していたことはわかる。百獣が素晴らしい音楽につれて踊るというのは、徳のある帝王によって治められた理想的世界である。しかしそれは実現が難しいこと、『尚書』のなかのこと、と考えられていたのであろう。

すぐれた帝王の音楽に動物が感応することを、治世の象徴と捉える儒教的な観点がある一方で、『荘子』にみえるような、動物には人間の音楽は理解され得ないとする見方が一般には受け入れられていたと考えられよう。

そんななか、音楽演奏に動物が反応する実体験を記した唐の代宗朝（762～779）の杜鴻漸の以下の話をみてみたい。彼は玄宗皇帝が得意としていた羯鼓（かつこ）という打楽器の名手であった。その彼が羯鼓を演奏したときのことである。

> 川の下手に羊の群れが見えて、たちまち数頭が足踏みをし始め、やめなかった。わたしはそれが羯鼓の演奏のためとは思っていなかった。だが、羯鼓を止めると足踏みもやみ、また羯鼓を打つと足踏みを始め、ついには緩急高低に応じてリズムをとった。……それゆえに『尚書』にいう「百獣率舞」も難しいことではないと知ったのである。（初見羣羊牧於川下、忽数頭躑躅不已。某不謂之以鼓然也。及止鼓亦止、復鼓之、亦復然、遂以疾徐高下而節之……是知率舞固無難矣。）『太平広記』巻205に引く『羯鼓録』

中略部分には、羊に加えて牧羊犬も羯鼓の演奏に合わせて首をあげ尾を振り体を動かしたとある。唐が大混乱に陥った安史の乱後に語られたこの出来事には、儒教的な治世の象徴としての「百獣率舞」の意味合いは含まれていないだろう。それゆえに、純粋に羯鼓の演奏に羊や犬が反応したとの記述であると考えられる。そうならば、古代に謂われた「百獣率舞」がこうしたことだったのかもしれないと感じた唐代の人に、それからまた千年以上の時を経たいま、筆者はふと共感を覚える。

ローマ法王、ウクライナ侵攻を非難

大ローマ布教所長
山口　英雄　*Hideo Yamaguchi*

侵攻に対する法王の素早い反応

本年85歳のローマ法王フランチェスコは、ロシアによるウクライナ侵攻に厳しい非難の声を上げている。法王は毎週日曜日に行われるアンジェルスの話で、戦争を嫌悪し、戦争を早く終結させて世界平和を希望すると述べている。侵攻当日の2月24日の時点で、早くも戦争解決のための最初の提案を行った。

法王は、その2日後の2月26日、ローマにあるロシア大使館に出向き、戦争に対する自らの懸念について伝えている。昨年（2021年）12月17日には、ロシアのウクライナ侵攻を見越し、アレクサンダー・アドヴェエ大使を通じて、一般市民にも及ぶ戦争への恐れをすでに告げていた。法王はこの中で、特に子供達を守ること、また病人をはじめとして苦しんでいる人々の救護について述べている。また法王は、戦争が始まるや否や、キーウ（キエフ）の東方典礼カトリック教会首位大司教スヴィアトスラフ・シェブチュックに電話をして、「平和のためにできることは全て実行する」と伝えた。ツイッターでは、ロシア語とウクライナ語で「我々は皆きょうだいである」と述べ、「戦争は政治の破滅であり、人類の破滅である」と訴えた。

聖エジディオ共同体の創始者アンドレア・リッカルドは、「キーウは開かれた都市である」と定義している。キーウ当局との公式的仲介はなされていないものの、水面下で折衝を続けているようだ。ヴァチカンの国家秘書パロリンも、「良識のための時間はまだ残っている。また、対話の場も残されている」と述べている。法王はロシア総主教キリル1世と連絡を取って、「市民の犠牲」を避ける努力をするように要請している。

3月6日の一般謁見の日に、法王はウクライナ侵攻に関して次のように語った。

「ヴァチカンはできることは何でもする。特に平和の維持のため、戦争の終結のために働く。戦争当事者の間に同じ距離を持って立つ。我々は死者を生み出す戦争そのものを中止させたい。ローマには太陽が燦々と注ぐ日に、ウクライナでは、血が流され、涙が流れているのだ。」

また法王は、ウクライナからの避難民を受け入れた諸機関に感謝の言葉を述べている。

法王のウクライナ及びロシア訪問の可能性

ウクライナのゼレンスキー大統領は2月26日、フランチェスコ法王に電話をし、ウクライナの現状を訴えるとともに、法王のウクライナのキーウ訪問を要請した。法王はゼレンスキー大統領はじめウクライナ国民が平和を求め、国を守ろうとしていることはよく分かるとしたが、訪問については明確な返事は避けた。ヴァチカンのパロリン国家秘書は次のように述べている。

「兵器の使用は喜ばしいことではない。しかし、命を守る権利はある。国を守り、生命を守るために武器を取る必要もある。これは正当防衛に当たると思う。法王は武器を使用することは悪魔の行いであり、神の思惑とはかけ離れていると言っているが、戦争を止めるのは、両者の対話しかないのだ。」

ローマ法王のウクライナ訪問にはいろいろな問題があって、そう簡単にはいかないようだ。法王がウクライナに行くためには、ロシア総主教キリル1世、東方典礼カトリック教会首位大司教シェブチュックの同行、同席が必要となる。また法王訪問となると、現在進行中の戦争を一時中断し、平和のうちに三大主教が、戦争の停止を話し合い、平和を求めなければならない。対話に際して最も困難になる要因は、ロシア正教会のキリル1世の言動だ。彼はプーチンのウクライナ侵攻は正しいことだと評価している。彼はプーチンを支持しているのだ。その根拠は、西欧が支持する同性愛者の市民権に反対しているところにある。そこから、西欧諸国に反意を翻しているのだ。ともあれ、西欧のホモセクシャル、麻薬の服用、コロナウイルスのワクチン適用にも全て反対なのだ。

さらに政治的に眺めると、ロシアにとっては、1945年5月9日はナチス・ドイツに勝利したという大記念日である。ロシア陣営を離れ、EUやNATOに加盟しようというウクライナ政権をネオ・ナチと定義し、それを排除しようという大前提があるのだ。

当初、ウクライナ侵攻は早期に解決するものと思われていた。ロシアは軍事力の差から、ウクライナ侵攻後、数日のうちにウクライナを陥落させることができると思っていたようだ。しかし、ウクライナの女性や子供たちはEU加盟の国々に避難したが、残った男性達の共同防衛が功を奏し、各地で善戦が続いて、武力的に勝るロシア軍はあちこちで窮地に陥っている。きっとアメリカやEU諸国の支援が大きく働いているはずであろう。

ローマ法王のウクライナ訪問の可能性はあるのだろうか。法王は現在満85歳。体力的にはあちこちへの移動が難しくなりつつある。法王は去る4月2、3日と地中海の心臓部のマルタ島を訪問。信者には元気な姿を見せていたが、右足の膝に大きな故障を抱えている。昨年入院して治療を受けたが、完治はしなかった。退院後その症状はさらに悪化し、移動のための足の運びにも大きな痛みがあることは第三者の目にもわかる。去る4月27日の一般謁見の時にも、椅子に座ったまま参列者に話しかけていた。そのため、法王は多くの儀式に参列できなくなっている。医者たちは法王に関節の手術をするように勧めている。

本稿執筆時の5月3日、新しいニュースが飛び込んできた。法王はモスクワで、プーチンに会う準備ができたというのだ。

「私（法王）は、ウクライナ大統領ゼレンスキーに電話をして、『プーチンは戦争を今のところやめないようだが、私はプーチンに会うために、モスクワに行く用意がある。だから今の時点ではキーウには行かない』と述べていた。戦争が始まって20日後、私は秘書パロリンに対して『法王はモスクワに行き、プーチンに会う用意がある』とプーチンに伝えるように依頼した。しかし今に至るまで、プーチンからの返事はない。一体何をするのかと聞く者がいるが、私は一神父だ。なにをするかって？プーチンがドアを開ければ、私は一神父として、することをすべてするのだ。」

法王は5月5日には膝の手術をするということだった。

ニューヨーク通信（13）

文化協会でのたすけ合い

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井　陽一　*Yoichi Fukui*

今年は、1872年に岩倉具視を特命全権大使とする使節団が米国を訪問してから150周年。使節団訪問を契機に、同年、ニューヨークに日本領事館が設置された。150周年を記念してセントラルパークウエスト通りを南下する「ジャパンパレード」が5月14日に開催される。

今年はまた、アメリカから日本に野球が伝えられてから150周年とのこと。ジャパンパレードの前夜祭として、ニューヨーク・メッツの本拠地シティフィールドで試合開始前に「ジャパニーズ・ヘリテージナイト」が行われる。野球伝来150周年を記念した、ニューヨーク・メッツ主催の親日イベントで、日本の魅力を紹介するイベントが行われる。

日系コミュニティを盛り上げる嬉しいイベントが続くが、ニューヨークでは治安が悪化しつつあり、地下鉄やショッピングモールでは、銃の乱射事件が発生したり、アジア人をねらう増悪犯罪が横行している。世界ではウクライナにロシアが侵攻、状況は悪化の一途をたどっており、さまざまな事が限界にきているように感じる。今まで世界を治めてきた価値基準はもはや通用ぜず、互いにたて合い、たすけ合う陽気ぐらしのスタンダードがこれからますます大切になってくることが感じられる。

そんな中、文化協会を通して行われているささやかな助け合いの動きを紹介する。

ウクライナ支援チャリティ

4月8日、インターナショナル・アートアライアンスによるウクライナを支援するチャリティイベントが文化協会で開催された。この団体はここ数年毎年文化協会で展覧会を開催している芸術家団体で70名以上のアーティストが所属している。私はロシア人のグループだと思っていたが、実際のところアーティストの内訳はウクライナ人が3分の2、後の3分の1は、ロシアを含む旧ソ連の国々の人々で構成されている。

当日は、この団体以外にも演奏家、歌手、詩人などが集結し大勢の参加者で賑わった。ウクライナ国家のピアノアレンジ曲や詩の朗読、オペラに加え、ロシアの曲も披露された。演者も観客も一体となり、一日も早く平和が戻るようにと祈りの夜となった。政治の上では対立しているが、民間のレベルでは協力し助け合っている姿が印象に残った。

後日インターナショナル・アートアライアンスの会長から下記のような感謝の手紙をいただいた。

> 親愛なる天理チームの皆様！　ウクライナ支援のチャリティにご協力いただき心の底から感謝します。皆様のご尽力がなければこのプロジェクトは実現していませんでした。チャリティナイトの収益はオンラインも含め、絵画の販売、コンサートチケット、ジュエリーや書籍の販売で合計19,150ドルにもなりました。天理の皆様をはじめ、参加してくれたアーティスト、ボランティア、来場者の方々のお陰でウクライナに支援金を送ることができます。ありがとうございました。

普段からの繋がりと文化協会のようなスペースがあったからこそ実現できたのだろうと思う。

子育て交流会「Joy Café（ジョイカフェ）」

3月12日、新型コロナウイルスにより休止していた保護者のための子育て交流会「Joy Café」が内容も新たに練り直され、対面とオンラインのハイブリッド式で再スタートした。教内外からトークゲストを招き、前半は講義、後半は講師を交えてお茶やお菓子をいただきながら、茶話会形式で育児や教育などの

相談、情報交換の場を提供している。毎月1回の開催でこれまで下記のような内容で会が持たれている。

第1回「免疫の強い子どもの育て方」
第2回「大学への道のり」
第3回「NY小中学校の教育事情」

参加者からは「初めて聞くことも多くすごく参考になった」「普段、意見交換する機会があまりないので、貴重だった」などの声が聞かれる。

この「Joy Café」の時間に合わせて、別室でゲームや音楽を通して参加者の子供さんを預かる「てんりこどもくらぶ」もスタートした。毎回文化協会のスタッフが熱心に練り合い、力を合わせて会を運営している。

2年後の2024年6月には、アメリカ伝道庁の創立90周年記念祭が開催される。それに向けた活動指針として、地域社会コミュニティの人たちへの繋がりや働きかけが重視されている。この「Joy Café」や「てんりこどもクラブ」を通して、さらにコミュニティへの繋がりが深められることを楽しみにしている。

天理チェンバー・プレイヤーズ結成

文化協会を拠点に活動する室内アンサンブル「天理チェンバー・プレイヤーズ（TCP-NYC）」が、新型コロナウイルスの節を乗り越えて、この度、新たに結成された。文化協会のクラシック音楽のディレクターであるアルバート・ロット氏が中心となり、マンハッタン音楽院、マネス音楽院、ジュリアード音楽院の著名な演奏家、教授、卒業生によって構成されている。演奏の大家とこれからの若き演奏家がお互いに協力し合い、世代、ジャンル、背景の異なるアーティストが力を合わせコラボレーションする。

シリーズの第1回目として、5月22日に、小説家でもあるエリザベス・フランク教授とのコラボ「音楽とスピーキング・ワード」が開催される。こうした催しを通して、文化協会があるグリニッジビレッジのコミュニティが新たな憩いの場と優秀な人材の育成の場となることを期待している。

「碍」の字表記問題再考（19）仏教にみる障害者像

おやさと研究所嘱託研究員
天理大学非常勤講師
八木　三郎　*Saburo Yagi*

推古天皇は594年（推古天皇2）に「三法興隆の詔」を発令し、国家として初めて仏教を公認、摂政の厩戸王は「十七条憲法」の中で仏教の重要性を説いた。その背景には、各地で頻繁に発生する飢饉や蔓延する疫病など、それらの救済を願う一心でわが国に伝来した仏教の力にひたすらすがるとともに、争いの絶えない人々の心を治め、鎮護国家を構築することに力を注いだ。

神仏習合

仏教の伝来はわが国にとって国を揺るがす一大事であり、衝撃的なものであったようである。『日本書紀』によれば、第29代欽明天皇時代、わが国は朝鮮半島の高麗、百済、新羅、任那との政治事情の軋轢や、加えてわが国の内乱で不安定な激動の時代であったことが記されている。

そんな時流の中、552年（欽明天皇13）に百済の聖明王がわが国に対して使節を遣わし、「釈迦仏金銅像」と「幡蓋（はたきぬがさ）」「経論（きょうろん）」を献じたと記録されている。聖明王は、仏を篤く礼拝することにより功徳を得ることができる「福徳果報」を説いたとされ、これが仏教受容の契機となったようである。仏教の伝来は552年説が『日本書紀』には記されているが、747年（天平19）の『元興寺伽藍縁起幷流記資材帳（がんごうじがらんえんぎならびにるきしざいちょう）』には538年（宣化天皇3）に仏教が伝来したと記されている。また、917年（延喜17）頃に法隆寺の僧侶によって撰述された厩戸王の伝記資料である『上宮聖徳法王帝説（じょうぐうしょうとくほうおうていせつ）』では仏教伝来は戊午（つちのえうま）の552年ではなく、壬申（みずのえさる）の538年と記されており、現在ではこの538年が仏教公伝の定説となっている。

『日本書紀』には、さらに当時の模様が詳しく記されている。欽明天皇は百済の使者に対して受容するかどうかは自分一人では決断せず、臣下と相談の上に決めると答えている。

欽明天皇は祀るべきかどうかを側近に問い、その結果、渡来人と交流が深い蘇我稲目に仏像を授け、飛鳥小墾田（おはりだ）の蘇我稲目の家に安置させた。この仏像は「蕃神（となりのくにのかみ）」として祀られ、古来のわが国の神道の神と区別するとともに、同質の神として扱った。これがわが国の「神仏習合」である。しかし、585年（敏達天皇14）に天然痘が大流行し、敏達天皇自身も罹患し、崩御している。その原因は在来の神の怒りによるものとして受け止められ、豪族たちの反感、反発を招いたのである。それにより、神祇祭祀と深い関わりがあり、反仏派であった物部守屋（もののべのもりや）と中臣勝海（なかとみのかつみ）などは疫病の流行は仏像のせいと決めつけ、物部守屋はその仏像と仏像を祀る蘇我稲目の家を焼き払っている。さらに、わが国初の尼僧となった善信尼を禁固して鞭打ちの刑に処したことが書かれている。

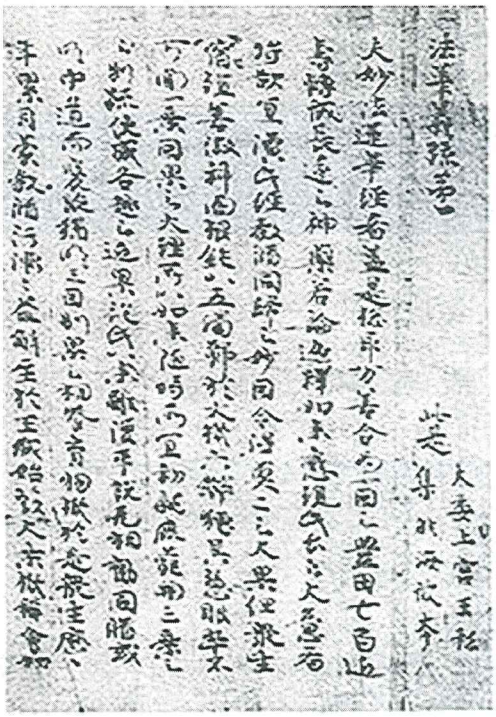
仏教の受容は容易ではなかったことは史実により明らかである。その後、数十年にわたる反仏派と崇仏派の争いの果てに仏教は受容され、国家仏教として崇められるようになっていくのである。それを物語るものとして、660年（斉明天皇6）の5月に天皇の勅命によって催された「法会」で読まれた『仁王般若波羅蜜経』に次のような記述がある。

> 有司奉勅、造一百高座、一百納袈裟、設仁王般若之会（田村圓澄・川岸宏教編：1985年、52頁）

この文言が意味することは、「国の内乱をはじめとする諸事の困難に対して、百の仏像、百の菩薩像、百の羅漢像、百の比丘像などを安置し、百の法師を請うて朝夕の二時、この経典を講読するならば、国土の百部の鬼神、また各部ごとの百部の鬼神が、この経典の講読を聞くことを楽い、国土を守護するであろう。火難、水難、風難など一切の諸難があれば、ただちにこの経典を講読せよ」と、ひたすら経典を唱えることを説いている。

三経義疏

仏教の歴史を遡る中で日本史の教科書にも掲載され、有名な史実の一つに厩戸王が著したといわれる『三経義疏（さんぎょうぎしょ）』がある。611年（推古天皇19）に『勝鬘経義疏（しょうまんきょうぎしょ）』1巻、613年に『維摩経義疏（ゆいまきょうぎしょ）』3巻、615年に『法華経義疏（ほけきょうぎしょ）』4巻の仏教経典の解説書を撰述している。これらを総称して『三経義疏』と呼んでいる。日本仏教にとって重要な経典の注釈書である。



『法華義疏』Wikipediaより

『日本書紀』には、仏教の興隆により高句麗、百済より多くの僧がわが国に渡来し、それに伴い仏教文化が押し寄せてきたと記されている。仏の教えを受容しただけにとどまらず、仏教芸術、建築、生活様式、政治、思想などさまざまな外来文化を受け入れたのである。

わが国は朝鮮半島より仏教が伝播しているが、高句麗、新羅は当時、中国南北朝、隋、唐時代の仏教の影響を強く受けている。厩戸王が特に高句麗の僧慧慈（えじ）から、「勝鬘経」、「維摩経」、「法華経」について師事を受けたことが『三経義疏』の撰述に深く影響しているのである。

［参考文献］
家永三郎教授東京教育大学退官記念論集刊行委員会『古代中世の社会と思想』三省堂、1979年。
高取正男ほか『古代日本と仏教の伝来』雄山閣出版、1981年。
田村圓澄・川岸宏教編「聖徳太子と飛鳥仏教」『日本仏教宗論集』第1巻、吉川弘文館、1985年。
宇治谷孟『全現代語訳日本書紀』（上）（下）、講談社学術文庫、1988年。

第 347 回研究報告会（2022 年 4 月 28 日）
「自由と平和ーウクライナ侵攻：宗教界の声明を見る」
堀内みどり

ロシアによるウクライナへの武力行使に対して日本の宗教界による「声明」「談話」について紹介した。教団・宗派のホームページでの掲載が確認できたものを中心に、ウェブニュースで報道されたニュースの情報の一部を提供した。最も早い声明は、2 月 25 日付の日蓮宗宗務院総長名のもので、その後仏教会から相次いで声明文や談話がホームページ上で発表された。武力行使への遺憾の意や戦争・紛争の悲嘆さを表明し、1 日も早い平和回復を願う趣旨が短文の中に表現されている。キリスト教系ではカソリックもプロテスタントも「3 月 2 日の灰の水曜日」に合わせた祈りと断食を呼びかけていた。

報告会の後半では、国際学部の日野貴夫氏から、現況について質疑応答の形でお話を伺った。天理大学はロシアともウクライナとも交流があり、それぞれ約 50 名、約 90 名の留学生を受け入れてきたこと、天理大学からも留学に行っていることなどを中心に、現況をお聞きした。

連載執筆のねらいと執筆者紹介

「文脈で読む『身上さとし』」

本連載では、「おさしづ」の「身上さとし」に込められた神意をその文脈に沿って探究していく。そのねらいは二つある。

第一に、おたすけとはどのようなものか、ということの探究である。古今東西、身体の不調は当人および周囲の人々の生活を揺さぶり、根本的な反省を迫る。実際、お道の教えを聞くようになるきっかけの多くは身上の障りであり、あるいは、たとえ信仰するようになっても改めて真剣に教えを求めるときは、何らかの身上や事情で自身の生活の行き詰まりを感じるときであろう。本連載では、そうした状況において「おさしづ」ではどのような言葉が伝えられているのかを見ていきたい。つまり、「おさしづ」をおたすけの現場の言葉として読み解くということが第一の主眼である。

第二に、「身上さとし」を個人の病状に対する「原因―解決」の枠組みで見るのではなく、そのお言葉の文脈や教史の流れも踏まえながら見ていく。つまり、そこに込められた神意を単に個人的な感得の次元だけではなく、その家族や周囲の人たち、さらには世界中の人々に対する諭しとして探究していくことが第二の主眼である。多くの場合、個人の身上は、周りにとっては事情でもある。その意味で、本稿では便宜上主に「身上さとし」の言葉を使うが、意味合いとしては「事情さとし」も含まれている。

また、本連載の前提には深谷忠政著『身上さとし―おさしづを中心として―』（天理教道友社、1962 年）がある。連載タイトルには、『身上さとし』に示された洞察を各「おさしづ」の文脈から捉え直すという意味も込めている。

深谷耕治（ふかや　こうじ）

天理大学人間学部宗教学科講師。1983 年奈良県生まれ。京都大学大学院修士課程（社会学）を修了後、バークレー神学連合大学院修士課程（宗教学）に留学し修了。その後天理大学附属おやさと研究所の嘱託研究員、同大学の非常勤講師を経て現職。専門は天理教学、宗教研究。

2022 年度公開教学講座のご案内

―信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（8）―

2022 年度の公開教学講座は、次の日程で、昨年度と同様にオンラインでの配信を予定しております。ただし、状況に応じて、対面での開催も検討いたします。

第 1 回 5 月　永尾教昭所長　オンライン配信中
151 話「をびや許し」
第 2 回 6 月　澤井真研究員
111 話「朝、起こされるのと」
第 3 回 9 月　岡田正彦研究員
139 話「フラフを立てて」
第 4 回 10 月　八木三郎研究員
108 話「登る道は幾筋も」
第 5 回 11 月　森洋明研究員
119 話「遠方から子供が」
第 6 回 1 月　堀内みどり主任
126 話「講社のめどに」

グローカル天理
第 23 巻　第 6 号　（通巻 270 号）
2022 年（令和 4 年）6 月 1 日発行
発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒 632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp
印刷　天理時報社
Printed in Japan
© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University